

第3章 紀州徳川家の時代



井沢弥惣兵衛と紀州流の土木技術

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)・平成時代

亀池の築造

大畠才蔵は、1706（宝永3）年正月から、1年9か月をかけて、亀ノ川の蛇行した流路とは別に、布引村と毛見村（ともに和歌山市）の間をほぼ直線状に流れる新川に改修しました。その結果、下流域の低湿地の水田化や荒れた砂地と干拓地の開墾ができるようになりました。そこで、下流域の村々へ、安定した用水を確保するため、亀池を造る計画を立てました。那賀郡溝口村（海南市）出身で、紀州藩士の井沢弥惣兵衛為永が指揮をとり、藩の直営工事として阪井村に大きな溜池を造りました。1710年に起工して、農閑期の3か月余の工事で竣工しました。池の水を利用する阪井村のほか10か村から人夫を出させて、村ごとに受け持ち工区を割り当て、それぞれの村の責任で工事をさせました。

水源は、亀池の南方の山腹に降る雨水と、亀ノ川の上流辺から水路で集めて亀池へ注ぐ雨水です。亀池



亀池（海南市）

から流れる水を合わせて水量が増えた亀ノ川は、現在の海南市の阪井から旦来、多田、岡田と、和歌山市の仁井辺、小瀬田、薬勝寺、本渡、内原、紀三井寺、毛見の11か村の水田をうるおしました。

井沢弥惣兵衛は、その後もすぐれた土木工事担当の役人として、徳川光貞、綱教、頼職、吉宗、宗直の五代の藩主に仕え、30年余り紀州藩内各地の治水や灌漑用水の工事にたずさわりました。井沢が、伊都郡代官所の郡方役人時代の1696（元禄9）年3月、学文路村の大畠才蔵に出会い、藩の役人に召し抱えたことが、紀州の土木技術をさらに向上させることになりました。

幕府への登用

1722（享保7）年10月、將軍徳川吉宗は、紀州藩主徳川宗直に命じて、伝法御蔵奉行であった井沢弥惣兵衛を、近江国（滋賀県）琵琶湖の水辺の干拓工事に参加させました。工事が完成して井沢は、技量をさらに高く評価され、翌1723年7月、幕府の御勘定方に200俵扶持で招かれました。59歳という高齢でしたが、土木技術者として円熟の域に達していました。その翌1724年、紀州藩で井沢の配下であった「地方の巧者」=すぐれた土木技術者たち9人も、幕府は召し抱えました。井沢と共に天領（幕府領）の治水

干拓をさせるつもりでした。その後井沢は、1725年には、勘定吟味役格^{かんじょうぎん}、1731年には勘定吟味役と昇進し、幕府の行う河川工事や新田開発^{しんでん}を担当する役人として、1736（元文1）年まで14年間にわたって、困難な土木工事を手がけています。

井沢の紀州流の土木工法は、湖沼の干拓に適した工法なので、湖沼の多い関東平野での開発工事には、重要な役割をはたしました。井沢ら紀州流の土木技術者の活躍の場は広がりました。1722年印旛沼（千葉県）、翌1723年飯沼（茨城県）、1724年見沼（埼玉県）、1725年手賀沼（千葉県）などの干拓に、井沢はすべて設計と工事の監督^{かんとく}をしています。

紀州流の干拓工事の特色は、湖沼に流れ込む川水の遮断ができるかどうかにかかります。また、排水による干拓だけでなく、水田に必要な用水路を付けなければなりません。干拓の願書を出して勘定方の見分を受け、許可が出てから工事に着手しますが、その費用は、関係する村々が負担する普請^{ふしき}ですから、都市商人から借金をしました。井沢の助言で幕府から借入れるときもありました。井沢はすぐれた土木技術者ですが、秀でた行政官でもありました。

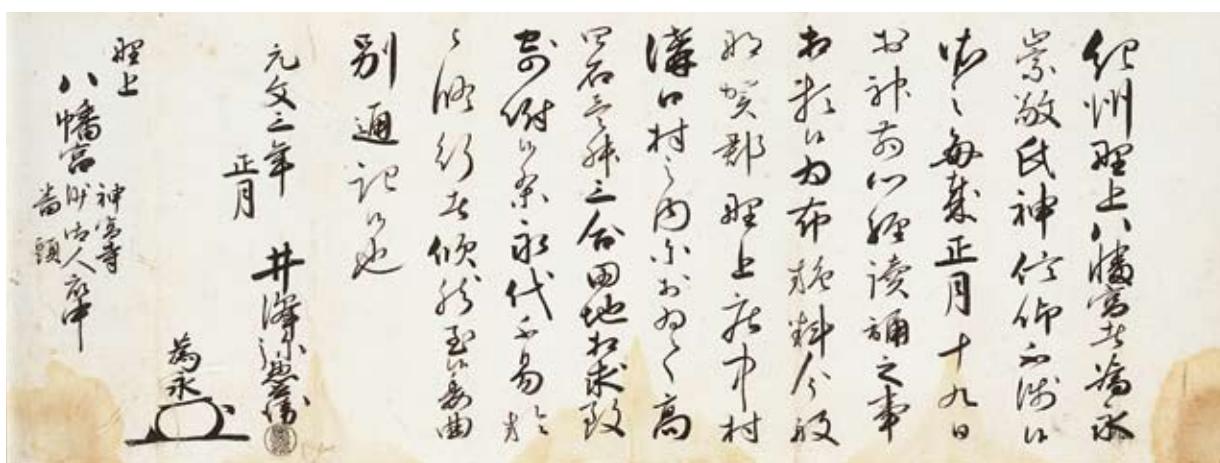
見沼代用水と干拓

見沼の干拓は、井沢が手がけた有名な土木工事です。天領^{はたもと}、旗本領^{ごうろう}、藩領など8か領221か村が見沼の水を利用して水田に灌漑していましたが、ひとたび豪雨になると、たちまち水が氾濫して民家や田畠に大きな被害をもたらしました。

1725年、幕府の命により、井沢が見沼溜井^{ためい}を下検分して開発に取りかかりました。翌年測量が開始され、配下の御普請方の保田太左衛門に測量をさせました。紀州流の工法の特徴^{とくちょう}を發揮^{はつき}して、延長95キロ余の用水路（見沼代用水）をつくりました。パナマ運河と同じ開門水路で画期的な用水でした。利根川から水を引いて303か村の水田を灌漑し、1,228町余の干拓地を造成しました。

1734年の越後（新潟県）紫雲寺潟の干拓も大事業でしたが、関東平野で手がけてきた干拓の経験が、この難工事を成功に導きました。

1737年9月、井沢弥惣兵衛は病氣のため役職から身を引きました。半年後の翌年3月、76歳で永眠しますが、その直前の正月、郷里の野上八幡宮へ田地を寄進^{きしん}しています。その寄進状は、井沢弥惣兵衛の唯一の遺物^{いぶつ}として、野上八幡宮（紀美野町）に現存しています。



井沢弥惣兵衛の寄進状（野上八幡宮蔵）